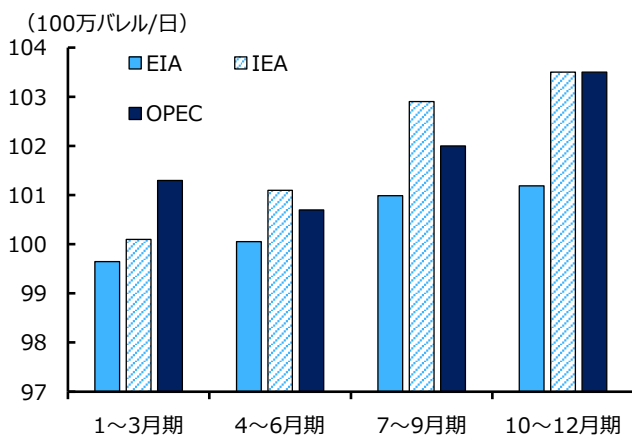


原油価格に上振れリスク

—ロシアとOPECの原油生産低迷で需給ひっ迫へ—

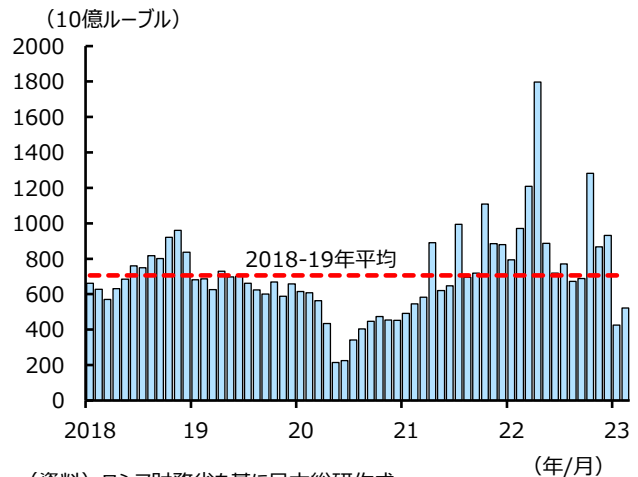
- (1) 世界の原油需要は、中国のゼロコロナ政策撤廃に伴い先行き着実に回復するとの見方が大勢。米エネルギー情報局（E I A）や国際エネルギー機関（I E A）などの原油需要見通しは年後半にかけて増加（図表1）。一方、原油供給は、以下2点を背景に停滞する可能性。
- (2) 第1に、ロシアの減産。ロシアは、3月の日量50万バレルの自主減産を発表。ロシアでは、ウクライナ戦争の長期化を受けて歳出が拡大する一方、ロシアの石油・ガス収入は大幅に減少（図表2）。ロシア産原油の代表油種であるウラル原油価格は足元で60ドルを割り込み（図表3）。減産によって原油価格を底上げし、歳入を確保することがロシアの狙い。
- (3) 第2に、OPECプラスの増産への慎重姿勢。OPECプラスは2022年10月会合で日量200万バレルの減産に転じて以降、原油市場を取り巻く不確実性の高まりなどを理由に需要を見極める方針を維持。次回6月会合で減産幅を縮小することがメインシナリオながら、原油価格を高値圏で維持したい産油国は、安易な増産には踏み切れない状況。
- (4) 今後、ロシアが減産するとともにOPECが増産を実施しない場合、世界の需給バランスは年後半にかけてコロナ禍からの回復期と同程度の日量200万バレル近い需要超過に（図表4）。原油価格への上昇圧力が高まる可能性。

（図表1）各機関の2023年原油需要見通し



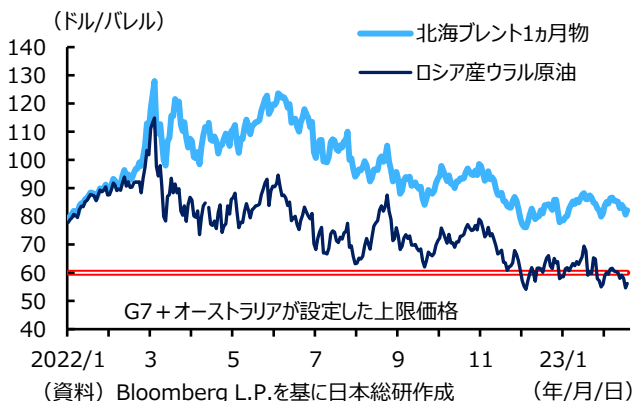
（資料）IEA、OPEC、EIA

（図表2）ロシアの石油・ガス収入



（資料）ロシア財務省を基に日本総研作成

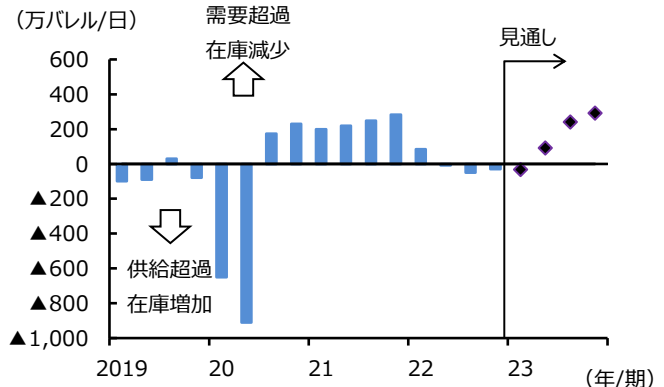
（図表3）北海プレント原油価格とウラル原油価格



（資料）Bloomberg L.P.を基に日本総研作成

（注）ロシア産ウラル原油価格は、Bloombergが算出する北海プレント1ヵ月物価格とウラルのスプレッドを基に算出。

（図表4）世界の原油需給バランス



（資料）IEA "Oil Market Report"、OPECなどを基に日本総研作成

（注）見通しは、OPECが現在の減産体制を維持し、ロシアも継続的な自主減産を行った場合。

【ご照会先】調査部 副主任研究員 松田健太郎 (matsuda.kentaro@jri.co.jp, 080-4176-4439)

本資料は、情報提供を目的に作成されたものであり、何らかの取引を誘引することを目的としたものではありません。本資料は、作成日時時点で弊社が一般に信頼出来ると思われる資料に基づいて作成されたものでありますが、情報の正確性・完全性を保証するものではありません。また、情報の内容は、経済情勢等の変化により変更されることがあります。本資料の情報に基づき起因してご閲覧者様及び第三者に損害が発生したとしても執筆者、執筆にあつた取材先及び弊社は一切責任を負わないものとします。